



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校と明治社会主義
Author(s)	松沢, 弘陽
Citation	北大百年史, 通説, 622-641
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30029
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p622-641.pdf



札幌農学校と明治社会主義

松沢 弘陽

札幌農学校が設立されて以来、北海道帝国大学として日本の学校教育体系の中に安定した位置を確保して後にいたるまで、学生の中には常に、その時の農学校・大学の現実にあきたらぬ雰囲気動いていた。その中心には、少数であったが、かなり自覚的な、学校や社会の現状に対して批判的な人々がいた。彼らの中のある者は、特に札幌農学校の位置が不安定な時期には、農学校での教育課程を途中でやめて他の学校に転じる者が少なくなかった。そうでない者の場合も卒業後は、農学校・大学の設立の意図や大方の教師たちの期待からはずれあるいはそれにそむく、職業や活動分野に進む者がいた。彼らは在学中は学生の中の少数者であった。卒業後は、その時代の成功への道を歩まず、母校や同窓生からも忘れられることが多かった。それぞれが進んだ分野での働きによってその道の友や同志に記憶される人々の場合にも、彼らが札幌農学校や北海道帝国大学の

出身であることが意外に思われることが稀ではなかった。彼らはこのように、忘れられがちな少数者であった。しかし彼らは、その時代の学生の中にひろがった批判的な雰囲気の凝集体ともいべき存在であった。その意味で彼らの歩みをたどることは、文書に現わされた学校の公的制度からはとらえきれない、学生の思想的社会的な動きを、一つのはっきりした角度から照し出すことになるであろう。小論では、札幌農学校から東北帝国大学農科大学の初期にかけての、学生の中に現われた社会的関心のめざめとその時代の社会主義への接近を概観したい。

一

札幌農学校卒業生たちは、最初から開拓使の学校創設の意図をはみ出したさまざまな分野に進出し、札幌農学校からのいわ

ゆる「変り種」の続出現象は、早くから注目される所となつていた。キリスト教のもとに集つた一・二期生の蔭にしばしば見失われがちだが、農学校の学生の間には、その時代の「書生」に共通する、天下国家を論じて気焰を上げる政治的情熱が強く脈打つていた。在学中から自由民権運動に心を寄せ、卒業後自由党に投じようとして果さなかつた志賀重昂はその筆頭であつた。四期生の志賀・菊地熊太郎、五期生の今外三郎が知識人ナシヨナリストの集団政教社を組織したことはよく知られているが、その後の政治青年型の学生は、労働問題や社会主義に向うようになる。六期生柳内義之進や予科第一〇期（一八九六年）卒業の西川光二郎らがそれである。札幌農学校卒業生についての、志賀重昂の列伝風の回想は、藩閥寡頭制——薩摩閥が支配する開拓使——に作られた農学校から、それに対する反逆者が生れる姿をよくとらえている。

柳内義之進氏、石狩国當別村の人……謙譲寡言、苦学勵精、仙骨を以て知らる……氏や藩閥政府に依りて厚く和洋両装の服を衣せられ、藩閥政府に依りて日夕夕餐を供せられ、藩閥政府の浴に沐し、藩閥政府の薪に依りて暖を取り、此の如くすること四周年、出づるや趣ち藩閥政府に反対し、演説場裡薩摩を懷より出し以て藩閥政府を痛撃す、彼れ竟に一奇物、亦た以て滔々たる曲学の徒を慚死せ

しむるに足る（矧川生「十年前録（二）」『亜細亜』二の一、一八九三年二月一日）

文中の薩摩薯云々は、こういうものを速やかに道外に放逐せよと、演壇から床に薩摩薯をたたきつけて、開拓使を牛耳る薩摩官僚を批判したという、当時よく知られたらしいエピソードを指すようである。

柳内義之進（一八六六—一九四四年）。一八七九年（明治一二）予科入学、一八八三年本科進学、一八八七年卒業。農学校一・二期生とともに一八八二年の札幌基督教教会（後の札幌独立基督教教会）創立に加つたキリスト者であり、農学校キリスト者学生グループの一人だった（ただし、一八九一年同教会を除名された）が、同時に早くから政治や社会問題への関心が強かつた。学生時代にすでにヘンリ・ジョージの『進歩と貧困』を読んだ（柳内「日本最初の労働運動」『五大洲』一九二〇年九月）というし、学生団体開議社の現在部分的に残る記録からも、卒業の年に「政事改良論」「比較法学概論」といった演説をしていることがわかる。学内ばかりでなく学外に出て、劇場大黒座で政談演説を開いて、農学校の教授たちを驚かせたという話も伝えられている（△△生「本校関係者と文筆の技」『文武会会報』五〇号、一九〇七年三月）。一八八七年（明治二〇）七月七日、三人の同級生とともに行った英語卒業演説の題は「北

海道問題」(英語原題をはじめ六期生の卒業演説に関する資料は、現存の農学校史料の中には残されていない)で、当時大問題となっていた外国人の内地雑居に、北海道の「労役者」の立場から反対するものだったらしい。それを分載しようとした『北海新聞』(一八八七年七月十九日)は、たちまち北海道庁から発行停止処分を受けた。

こうして世に出た彼は、当時の政治青年の多くと同じようにジャーナリズムに職を求めた。一八八八年(明治二一)九月六日『北海新聞』の後身『北海道毎日新聞』に入社、かたわら札幌法学協会を組織(一八八八年十一月)したり、盛んに政談演説を行っていたが、一八八九年(明治二二)、大同団結運動が北海道に及んで来ると、それに批判的な『北海道毎日』を退社、一八九一年(明治二四)には主筆として雑誌『北海時論』を創刊し、さらに中江兆民を主筆に迎えた『北門新報』に入社するが、翌年四月には兆民の退社と前後して退社し北海道を去った。東京に出た柳内は、東洋自由党を結成した大井憲太郎の片腕として機関誌『新東洋』に主筆として筆を執り、普通選挙期成同盟会や日本労働協会の役員となり、一時『万朝報』の記者となった後再び大日本労働協会や同協会の機関誌『大阪週報』、小作条令期成同盟会の幹部として、初期労働・社会問題の世界に華々しく登場した。しかも、運動はいずれも短命で、ほどな

く行きづまり、一九〇一年(明治三四)頃には大井と袂を別つにいたった。この前後一九〇一年には、『日出国新聞』編集主任となり、また『学生叢書』と題する学生向けのシリーズを新声社から刊行(一九〇一年)し、翌一九〇二年には九州に赴いた。宮崎の『日州独立新聞』(後『日州新聞』)・『鹿児島実業新聞』(後『鹿児島朝日新聞』)等の主幹となり、また、一八〇四年(明治三七)には、宮崎で「社会主義の理想」を掲げる「九州社会倶楽部」を組織した。一九一四年(大正三)には普通選挙期成同盟会の再興に返り咲き、翌一五年には再び東京に出て、大正デモクラシーの運動に出入りしながら、『五大洲』『産業公論』『飲業日報』等に筆を執り、一九一八年(大正七)には、雑誌『改造』創刊の協議にも加わった。このように浮沈を重ねたが、晩年は不遇だったという。一九四四年(昭和一九)一月十三日没。

二

一八九一年(明治二四)三月、六年余のアメリカ・ドイツ留学を終えて、母校に帰った新渡戸稲造は、学生を愛してやまぬ熱心と八面六臂の精力的な働きによって、学生との雰囲気や大きく変えるにいたった。本稿のテーマに関係するだけでも、

本科では農政学・植民学等を教え、一八九四年（明治二七）卒業の二期生山田幸太郎には研究題目として「ソーシヤリズム」を与えたという（高倉新一郎「札幌農学校教授新渡戸稲造（二）『北大季刊』七号、一九五五年一月。ただ実際に提出された、山田の卒業論文の題は「家畜衛生論」である）。彼は農業経済学専攻の学生の教育のために、新たに「演習」を導入し、一八九六年（明治二九）専攻学生の間に自発的な学習団体としてカメラ会が生れた。予科でも英語と倫理を担当して学生に大きな影響を与えた。一九一〇年代にいたるまで、本稿に登場する学生たちの間に、なかば伝統のように読みつがれてゆくことになったカーライルの *Scitor Rescius* が始めて講じられたのも新渡戸の予科の講義の一部としてだったらしい。新渡戸の講義は学生の心をゆすぶって、農学校の講義に満たされぬものを感じる者の間に、彼の課外講義を求める動きを呼び起し、彼はこれにも積極的に応じた。例えば、一八九二年（明治二五）に始められた英学協会では、カーライルの『フランス革命史』を講じている（『蕙林』五号、一八九三年四月）し、一八九五年（明治二八）には、本科一年生有志の、「本科学生が余りに物質的に傾き思想の一方にのみ偏せんことを防」（『蕙林』一八号、一八九五年十二月）ぐために哲学の講義をしてほしいという求めに応じ、歴史の授業が廃止されたのに不満を抱いた予科

四年生に乞われて、英学協会の講義という形で歴史の講義を行う等々である（『恵迪寮史』二二六ページ）。

彼はまた、学生の自主的な学習と親睦の気運を導いて一八九一年（明治二四）学芸会を組織させて、自から会頭となり、翌年からの機関誌『蕙林』刊行を始めとする活動を助け、一八九五年（明治二八）には学生寄宿舎の初代舎監となって自治を説くといった働きぶりであった。日曜ごとの、家庭でのバイブル・クラスについてはあらためてのべるまでもないであろう。

学外でも、彼は多くの分野に開拓的な仕事を始めた。札幌基督教教会会員を中心に、日本における禁酒運動の先駆として生れた北海禁酒会は、このころ千数百の会員を擁して活発に活動していたが、新渡戸は、一八九三年秋からこの会の客員として、公の集会で一連の重要な講演を行った。同年九月・十月「救貧事業」、十一月「婦人が慈善事業に関して働く方法」「社会党緒論」（以上、同機関誌『護国之楯』四九号、一八九三年十二月に、記載。一八九六年八月には、札幌農学校生有志が組織した、市民向け公開講座（一八九五年、西川光二郎・星野純逸ら三人が創設した。『蕙林』一七号、一八九五年九月）の第二期夏季講話会で、「社会党の話」を行った（『第二期夏季講話会報告』一八九六年）。しかし彼の学外における社会的事業として最大のものは、何といっても一八九四年（明治二七）に創設し

た遠友夜学校であろう。それは規模こそ小さかったが、日本の都市化が生み落した「下層社会」への、教育の面からの援助として先駆的なものであり、大学セツルメントとしても、一九二三年創設の東京帝国大学セツルメントに三〇年近く年先んじていた。

教授新渡戸がこのような情熱を傾けた多様な活動は、学生の心をゆすぶり、彼らの視野を広げ、そして、彼らの間に鬱積していたある種の空気を解き放ち、活気づけたようである。農学校が提供する講義にあき足らぬ学生が、新渡戸に頼んでさまざまな課外の自主講義を組織した事情についてはすでに述べた。

学芸会の活動は活発で、一八九八年（明治三一）には森広らを中心とする会員の自力で名著『札幌農学校』を世に送るまでにいった。休眠状態にあった学生の演説討論団体開議社も一八九三年（明治二六）秋から活動を再開した。新渡戸舎監の自治のすめが呼び水となったように、学生寄宿舎は、一八九九年（明治三二）、学生自治を実現した。カメラ会や学芸会は、「擬国会」を開くまでになった。この前後の『学芸会雑誌』（『蕙林』の後身）の寸評は、学生の新しい動きをよく伝えている。

○日課を繁にして寸閑なからしめ風儀を矯めんとするは誤てり北海大学生各見識あり日課繁閑豈関せん……○農学生にして擬国会を開く学生野心の存する所を知るべし

世に頼母敷は札幌農学校学生……○……法律は処世の要具寧ろ無用学課を廃して之を学科に加よ○将来 出身の農学生大農場主大実業家大学者となるべきは勿論と雖大政治家となるも亦妨げざるなり○動物 やるべし植物やるべし是れ学生中の大動物学者大植物学者たらん人に是非共懲遷せざる可らず○学校 は斯の如く各方面に向て大の字附の大人物を出さしむるべき也況や北海大學札幌農学校に於や○茲に 於て学課を改造し各専門学の専攻に便利ならしむるは所謂学校行政者の親切なるものに非ずや」（圈点は原文）（二四号、一八九七年十二月）。

◎其校 義百姓学校に御座候條国政を料理するの人才は差出すに及ばず候と官辺の御沙汰ありしを聞ず◎今の本科一二年級經濟を志願するもの各十数名を下らず学校若し是を節減せんか経世の才を殺す也（二三号、一八九七年四月）

農学校に対する国の政策や、学校当局の学生に対する教育・生活指導に対する批判の空気もまた明らかであろう。

このように視野を拡げられ広い世界への関心呼び起された学生たちの間には、あたかも日本に起りつつあった社会問題や社会主義に眼を向ける者が現われた。そのような動きは、ある場合には札幌農学校を去って東京に出、他の学校に転じるとい

う形をとった。一八九二年（明治二五）予科に入って、新渡戸教授の『フランス革命史』講義も聞いた児玉信雄（伝八とも言ったが、『札幌農学校一覽』等には信雄とある）は一八九四年には東京専門学校文科に転じた。それと入れかわりに予科四年に転入した西川光二郎は、社会主義を口にする二、三の学生（——おそらく予科生）を通じて社会主義を知り、ともに社会主義について研究するようになり（後にのべる、社会派学生の中心蛎崎知次郎とはこの頃親しかったようである。西川の雑誌『自働道話』二三三号、一九三三年九月、中の西川の回想）、また新渡戸が「社会主義に興味ある人たるより時々断片社会主義の事を語り、又大に益せられ」たという。在学二年間、学芸会でも文章に演説に活躍していた西川だったが、その間に「全く社会主義の信者となりしかば、農学校に用なしとの感を起し」、一八九六年（明治二九）予科を卒業すると同級の佐藤静とともに東京専門学校英語政治科に進んだ（西川「予は如何して社会主義となりし乎」『平民新聞』三号、一九〇三年十一月二十九日。なお、「何よりも魂の問題が大切」『道』三〇五号、一九三三年十一月および『学芸会雑誌』二八号、一八九九年二月、の記事を参照）。

新体詩の世界に進んで花外と号した児玉の道と、西川のそれとは、東京専門学校、内村鑑三の『東京独立雑誌』、そして明治

社会主義の運動の中で相交わることになった。

西川の回想がすでに、社会主義に心を寄せる学生二、三人の存在を紹介しているが、彼の卒業と前後して、社会問題や社会主義への関心は農学校学生の中に急速にひろまっていた。

『蕙林』『学芸会雑誌』両誌上に現われたこうした動きの反映をたどれば、松沢辰三郎「講演派社会主義」（一三三号、一八九四年十一月）、藻泉（星野純逸）「建設者と破壊者」（一九号、一八九六年四月）。蛎崎木馬（知次郎——蛎崎自身、知次郎、知二郎と両方使っている）「蟻蟻の一言」（二五号、一八九八年二月）は「日本の社会は社会主義にあらざれば亦た救済すべからざるなり」と主張する。滝泥舟（臣弼）「幌内炭山に於ける労働者」（二九号、一八九九年八月）は教授に従って植物地質の調査に行った学生の、炭鉱労働者についてのルポルタージュである。「木馬」が三二号（一九〇〇年六月）に寄せた「先輩の効蹟」は、「北海道小農」の「擁護者」「朋友」「護神」として献身したところ、農学校の先輩の偉業だとして、政府の「大地積特別貸付」（——「北海道国有未開地処分法」であろう）制度に保護された「財権的地主の権力寧ろ暴力の闖入」を阻止せよと訴え、「夷人の保護」は、「北海道旧土人保護法」がかえって、アイヌの人権と自立・発達を阻むことを批判している。同じく蛎崎木馬の「文明病」（三三三号、一九〇〇年十一月）

は、「文明」の進歩がその反面に惹き起す病としてのさまざまな社会問題を解明し、それを除くため「国家社会主義の旗下に」戦うことを宣言している。

また、『学芸会雑誌』の断片的な記事からも、学芸会の集會やカメラ会の研究会が、学芸会機関誌の評論と同じ傾向を示していることがうかがわれる。学芸会の一八九九年（明治三二）九月常集會では広瀬潤平（——自治制恵庭寮初代委員長）が「社会主義と個人主義」と題して（三一）号、一八九九年十月、一九〇〇年（明治三三）二月常集會では蛸崎知二郎が「吾も亦虚無党の下に劔を執て健闘せんか」と題して（三二）号、一九〇〇年六月）演説している。一九〇〇年前半のカメラ会の講演八つの中には「トラスストに就く」（平沢真）『History of Socialism, Kirkup（蛸崎知二郎）』『石黒氏のマッチ工場につきての調査』（本多敏樹）『Progress and Poverty』（森本厚吉）『鉄道国有論に就て』（伊藤清蔵）『労働経済論』フレンド 田氏共著」（和田真）といった題目が見える。

農学校学生の社会問題・社会主義への関心は学内での研究に限られていなかった。彼らのある者は、一方では札幌や北海道の具体的な社会問題に具体的に取り組もうとし、他方では、東京から全国に拡がる労働運動・社会主義との間に積極的な交渉をたもっていた。彼らを地域社会の具体的な問題に結びつける

場として大きな意味をもったのは、何といっても遠友夜学校の存在であった。本稿に登場する人のほとんどが、またそれ以外の多くの学生が、教師としてこの学校に集まる少年少女のために献身した。それはこの時期から、一九四四年（昭和一九）の学校の廃校まで、札幌農学校―北海道帝国大学の心ある学生の間に、一つの伝統となっていた。理想主義的なしかし反面観念的な学生たちが、貧しい生徒との交わりを通して都市の「下層社会」の問題に、さらに日本社会全体の問題に目を開かれてゆく様子は、例えばこのような学生の一人だった有島武郎の日記がくわしく語ってくれる。北海禁酒会もまた、彼らのある者にとっては、社会問題に近づく一つの場だったらしい。機関誌『護国之楯』（四五号、一八九三年二月）は、農学校予科一年の蛸崎知二郎が入会したことを報じている。

札幌農学校生と東京に始まった社会運動との間には、片山潜を通じて、かなり密接な交渉があった。その緒をつけたのは、西川光二郎より一年早く一八九五年（明治二八）予科を卒業した森広だったようである。彼は足にけがをして、この年から一八九七年秋まで東京に出て帝大病院で治療を受け、この間に、片山潜が社会活動の根拠地として設けた、きんぐすい館を訪れたらしい。一八九九年（明治三二）札幌を訪れた片山は森を「旧友」と呼んでおり、『労働世界』は彼をきんぐすい館に

設けた青年倶楽部の「名誉員」として紹介している（六五号、一九〇〇年九月一日）。一八九七年十二月『労働世界』が創刊されると『学芸会雑誌』はこれを学生に紹介し（二五号、一八九八年二月）、学芸会が『札幌農学校』を刊行すると『労働世界』（一卷二〇号、一八九八年九月）は英文欄でこれを祝福するといった、エールの交換も見られた。

こうして一八九九年（明治三三）七月、片山が労働組合組織のオルグのために札幌を訪れると、蛸崎知二郎は片山と共に登壇して労働者の聴衆に幻灯を上映して熱弁をふるい（片山「東北通信（二）」、『労働世界』四二号、一八九九年八月十五日）、以後札幌における鉄工組合支部の組織のために大きな働きをした（『労働世界』五四号、一九〇〇年二月一日）。一方森は、片山を助けて「欧米に於ける近世社会問題」という「社会問題演説会」を成功させた（片山「東北通信（二）」）。翌一九〇〇年（明治三三）、片山が再び札幌を訪れた時、新築成った基督教青年会の「青年寄宿舎」の新築祝賀の式に彼を招いて、佐藤昌介、農学校長や宮部金吾会長とともに講演させたのも、おそらく、農学校キリスト者学生の中心であり、当時基督教青年会長だった森広ではなからうか。片山の後を追うように出京した森を迎えて、きんぐすい館では、片山や幸徳秋水らが集まって青年倶楽部の集会が開かれている（『労働世界』六五号、一九〇〇

年九月一日）。また片山に先立って一八九八年（明治三一）七月には、蛸崎が「周旋」して、当時札幌滞在中のキリスト教デイスアイブル派の宣教師、「単税太郎」ことガルスト（Charles E. Gursd）の「単税論演説会」を開き、ガルストから、*Progress and Poverty* を贈られている。（『学芸会雑誌』二八号、一八九九年二月、なお講演会の詳細については、『北海道毎日新聞』一八九八年七月二〇日、二四日参照）。

一八九八年（明治三一）から一九〇〇年（明治三三）にかけては、札幌農学校―東北帝国大学を通じる、学生の中の社会問題・社会主義への関心の最初の昂揚の時期であった。その中心となったのは、森広、蛸崎知二郎や学業中途で病死した星野純逸らの他、有島武郎、森本厚吉、半沢洵らを擁する一九期生（一九〇一年卒業）であり、有馬が二〇年を経てふり返った未完の力作『星座』は、彼らの青春群像とその精神的雰囲気を生きて伝えてくれる。興味深いのは、これまでに名を挙げて来た学生たちが、例外なく、予科から本科に進む、いわば農学校の主流に属しており、農芸科その他のいわゆる「実科」の「生徒」の間には、彼らのそれに対応するような社会問題・社会主義への動きが見られないのである。

今日わかる限りでも、農芸科その他に学んだ人々が社会問題・社会主義に全く無縁だったわけではない。新渡戸稲造が札

幌農学校に教授として帰った一八九一年（明治二四）春農学校農芸伝習科に入学し（札幌農学校簿書、二十四年公裁録三冊ノ内校員及学生々徒報告）、翌年までには中退した（札幌農学校簿書、二十五年分公裁録四冊ノ内報告雜件）竹内余所次郎（一八六五—一九二七年）は、札幌農学校に学んだ者の中、明治社会主義におそらく最も深くかかわった人であった。彼は農芸伝習科中退の前後には北海道毎日新聞記者となり、北海禁酒会に入会した。一八九四年（明治二七）からは札幌区内で薬店を経営しつつ、社会的な活動を始め、同年には禁酒会の活動を「政治教育、慈善、労働等」の方面に拡大する改組を提案するなど、活発に働いた。一九〇一年（明治三四）、有島武郎、蛸崎知次郎らとともに札幌独立教会に入会、翌一九〇二年（明治三五）には、社会問題研究会を組織し、『聖書之研究』読者・札幌基督教会員として私淑した内村鑑三を迎えて理想団の組織に加わり、翌〇三年には幸徳秋水を迎えて演説会を開くなど、札幌のさらに道央の、市民の間の社会問題・社会主義の中心になっていった。彼の他にも北海禁酒会には農芸伝習科五期（一八九三年卒）の本郷敏慎がいたし、在米社会主義者の群に投じた同二期（一八九〇年卒）の小河亀次郎や農芸科二期（一九〇一年卒）のキリスト教社会主義者山田英一などがいたことも記憶に値いしよう。ただどういいうわけか、これまでに見て来た社会問

題、社会主義に関心を抱く予科・本科の学生・生徒たちは、同じ札幌独立基督教教会、あるいは北海禁酒会の会員としても、竹内をよく知っていたはずなのに、竹内を中心とする市民のグループと学生グループとの間には交渉があった様子がほとんど見られないのである。

しかし、このような農学校内部の社会問題・社会主義への関心の昂揚は、一九期生が卒業するとともに沈静期に入った。すでに一八九七年（明治三〇）には彼らの師父として大きな支えだった新渡戸稲造が農学校を去っていた。さらに一九期生中の理想主義・社会的関心派ともいべきグループがほとんど、教職について学問研究の道を求めて道外に去り、札幌の近辺に留まる者さえ少なかった。こうした中で学生内部には彼らに対する不満——特に『学芸会雑誌』が彼らの主張を反映しすぎるという不満——の巻き返しが起こったらしい。一九〇一年（明治三四）、学芸会が文武会に吸収され『学芸会雑誌』が『文武会雑誌』と変身した第一号には「政治時事に及ぶなく……」——といふこれまでになかった投稿規定が新しく掲げられるにいった。

三

しかし、彼らが呼び起した思想的な動きは、農学校から跡を

たったわけではなかった。彼らは、理想主義と現実批判こそが札幌農学校の「校風」だという「校風」論や「愛校」精神を唱え、それを下級生に伝えようとつとめた。そのために森本厚吉・有島武郎たちは、卒業に先立って師新渡戸から教わったカーライルの *Sartor Resartus* や英文学を学ぶグループを作り、下級生を熱心に導いた。一九期生の卒業後もこの自発的な共同の学習グループでは、消長はあったが絶えることなく続き、新入生が次々に加わったようである。

また、農学校学生内の社会問題・社会主義への関心は、このような上級生たちの影響によるばかりでなく、外からの新しい血によっても育まれていたようである。『サータ・リザータス』読書会の一人だった逢坂信彦は、彼より一年遅れて一九〇一年（明治三四）予修科に入学した新潟中学以来の親友眞島政吉に再会した時、彼がすでに「確信ある一個の社会主義者」となっており、「余は業を卒へたるの暁、必ず北海道の田舎に於て自ら農学を経営し、而して其の農場に於て社会主義を実行すべし」と宣言したこと、眞島との論争を重ねる中に強い影響を受け、自分の信じるキリスト教と社会主義との関係について苦しんだ後、キリスト教社会主義に活路を見出したことを述べている（逢坂『暗黒より光明へ』一九二五年改版、一四四—一六三、一六九—一七〇頁）。眞島が一九〇六年（明治三九）、本科

二年在学中に夭折した時、『文武会会報』は、哀惜の辞を掲げて「吾人全窓の敬愛する所にして又社会主義に関する造詣浅からず……」（五〇号、一九〇七年三月）とのべた。社会主義紙『光』（五号、一九〇六年一月二十日）の記述からは、彼が『直言』や『光』の読者だったことがうかがわれる。

農学校学生の間のような動きは、いうまでもなく、全国的な思想動向や社会主義の運動と無縁ではなかった。一九〇三年（明治三六）、幸徳秋水が札幌の理想団に招かれて札幌を訪れ、竹内余所次郎らの「社会問題研究会」の主催の演説会で社会主義を説いた時、聴衆の中には農学校生の姿も見られた。

『サータ・リザータス』読書会メンバーの一人だった予修科生足助素一は、同じく会のメンバーだった親友河内完治にその日の感銘を書き送っている（同年、八月十日付書簡）。さらに日露関係の緊迫—開戦と内村鑑三や幸徳秋水らの非戦論の主張は、農学校学生のある者の心を強くとらえるにいたった。もともと内村鑑三の著作は、農学校の理想主義・社会的関心派学生が、他の学校ではなく札幌農学校を選ぶ際からして、強い影響を与えていたから、『万朝報』や『聖書之研究』誌上の彼の文章を愛読する者が非戦の主張に導かれるのは自然なことであっだろう。逆に幸徳や堺枯川の非戦論からして社会問題に眼を開かれる者もいた。『文武会会報』（四二号、一九〇四年六月）

には『平民新聞』が寄贈されて図書室に備えてあるので「随時閲覧せらるべし」という案内があるし、『平民新聞』を個人で購読する学生もいた。

非戦論は、札幌農学校にとって、言論のレベルの問題にとどまらなかった。学校当局は一九〇四年（明治三七）二月二十九日、予修科及び土木工学科の画学講師（校長佐藤昌介と同じ札幌美以教会の役員でもあった）飯田雄太郎を解雇した（「退職者履歴資料」。処分が行われる少し前から、学生の間には、飯田がその非戦論の主張のため「言禍」をまねくのではないかとというニュースが流れていたようで、事態の推移を憂慮をもって見守っている者がいた。一学生は日記にこう記している。

三月三日……川島ガ来タイ氏（一日記公刊に際してイニシャルに変えられたものと思われるが、日記のそれまでの記述からして飯田雄太郎であることは確かである）ハ免職ニナツタサウデ彼レハ大ニS（―これも公刊の際イニシャルにされたものであろう。校長佐藤昌介か）ヤ学校ノ処置ヲ憤慨シテ曲学阿世トマデ罵ツテ居ル、実ニ余モ餘リニ学校ニ雅量ナク例令不謹慎ナルニセヨ此時ニ從テ主張ヲ狂ゲザル骨鯁ノ士ヲ追ヒ出シタル当局者ノ意気地ナシヲ措シムモノデアル、抑モ基督教信者ト称スルS、M（―これも同様であらう。教授宮部金吾が）ノ輩ハ何ヲ夢ミテ居ルノデア

ラウ、只教会ノ内デノミ又只平和ノ時ノクリスチャンノミデハ何ノ役ニモ立タヌノデアル（足助素一日記、『足助素一集』一九三一年）。飯田はこの年十月には、札幌平民新聞読者会を主催、後札幌を去って東京に出た。

理想主義に燃え社会的関心を抱く学生たちは、文武会や開誠社の活動にも積極的だったらしい。『文武会雑誌』（四一号まで）とその後身『文武会会報』（四二号以降）に現われた限りでも、次のような注目すべき文章や演説が発表されている。扼腕生「切齒録」（四一号、一九〇三年九月、成績と就職に汲々とする雰囲気批判）。刈南子『ミダス』（同前、カーライルや聖書によって金銭崇拜を批判する）。みすず「木馬の君を送る歌」（同前、蛸崎知二郎送別の詩）。菅井狂涛「我主義」（「吾人の主義は一種の社会主義なり社会主義は愛の主義なり云々」。五〇号、一九〇七年三月）。開誠社演説。一九〇三年一月一七日公開演説会、高村俊次部「初夢」（鉱毒事件と田中正造の献身にかんがみて学者と教育のあり方を問い、農学校の美風を探る。『文武会雑誌』三七号、一九〇二年五月、一九〇五年四月、逢坂信吾「我が校初期の学生々活を説き併せて人生問題に及ぼす」（同誌四六号、一九〇五年九月）。文武会演説。一九〇四年（明治三七）四月、池田競「維新の理想」（「国家を思ふ前に思ひを自己の理想と自覚との意識に走らしめよ云々」。四三号、

一九〇四年七月。同年五月、逢坂信吾^{〔キヤ〕}「サアタヤ・レサアタス」を紹介す^{〔同前〕}。

こうした学生たちの行動は時に学外にも及んだ。社会的関心を抱く学生たちが遠友夜学校に情熱を注ぎ、この学校が彼らにとって社会問題の実態への窓となったことは、新渡戸稲造が未だ農学校におり、彼の直接の影響の下にあった学生たちが献身していた頃と変らなかつた。深尾韶や原子基ら羊蹄山麓眞狩村に「平民農場」を築いた人々が一九〇七年（明治四〇）、谷中村の鉱毒被災救援のための募金活動を起こした時には、前年予修科に入学したばかりの「札幌農学校の同志」大石泰蔵が札幌からキモベツにまで出かけて彼らを助けた（「原子基氏より」『世界婦人』一九〇七年九月一日）。大石のような活動はおそらく限られた例外であり、大方の学生の地域社会の具体的問題への関心はやはり遠友夜学校での教育に限られていたといえよう。けれども農学校の中での、学生たちの社会的関心は、新渡戸稲造や森本厚吉、有島武郎のようなすぐれた指導者を失った後も絶えることなく続き、日露戦争後には、徐々にではあるがたかまろうとしていたようである。一九〇七年（明治四〇）八月十八日付の『社会新聞』に載せられた「南生」の「北海道札幌より」と題する通信に「社会主義研究は学生のうちにも侵入したるは事実なるが当地にても某々の学生等十五六名にて研究会

を組織したれるが世間の疑惑を避けん為秘密に附したりしを狗奴が嗅ぎ知り校長に密告せし故一場の説論を喰ひたりと聞く」と述べられたのは、それを反映するものといえよう。

四

農科大学学生内部にこのような気運が動いていた時、一九〇七年（明治四〇）の暮から翌年初めにかけて、これに働きかけ、はっきりした形にまとまらせてゆく二つの出来事が、時を同じくして起つた。一つは、一九〇七年の暮から翌年早々にかけての、日本社会党（一九〇六～〇七年）幹事・『社会新聞』記者として社会主義運動の全国的指導者の一人となつた西川光二郎の札幌遊説、もう一つは、一九〇八年（明治四一）一月の、五年にわたる留学を終えて、大学予科講師となつた有島武郎の赴任であり、両者いずれもが札幌農学校に学んで社会問題や社会主義への関心を抱くにいたつた事情はすでに見た。

西川光二郎は、一九〇七年十二月二十六日一年ぶりで札幌の土を踏み、旧知の竹内余所次郎宅を訪れた。西川が『社会新聞』に送つた通信によれば「此の夜農学校の同志逢坂（一信 悉）君と大石（一泰蔵）君来り大に余等の来訪を悦ばる、一時まで五人にて快談す」（西川生「遊説日誌（十）」『社会新聞』

一九〇八年一月十九日。翌二十七日は、逆に「夜農学校の同志七名に招かれ、旧友蛎崎（一知二郎、当時北海道庁技師）氏と共に是れに赴く、農学校の同志諸君は一月十日頃より一週一度づつ相会してラスキンの『アンツウ、ジー、ラスト』を研究する由なり、天ドンと蕎麦を食ひながら一夜談笑し、我が心頗る慰められたりき」（同前）という交歓があった。こうして二十八日には、午後は竹内余所次郎を始め札幌・小樽の社会主義者とともに西川及び同道の啞蟬坊添田平吉が登場して社会主義演説会が開かれ、年末と寒さの中に三百余の聴衆を集めた。西川の通信は、「此三百名中五十名位は農学校の学生諸君にして中に支那人も一名ありたりき」（同前）と報じている。

あたかもこのような新しい気運が動き始めた時、アメリカとイギリスで社会主義・アナキズムの洗礼を受けた有島が、その文献やトラクト類を携えて帰って来たのであった。この年一月二十一日から始まる有島の日記の二十三日の項に「夜社会主義研究会に臨み、Ruskin の "Unto This Last" の講義をなす。

逢坂君社会主義と基督教の関係を語る」と記されているのは、西川の報じる「農学校の同志諸君」が企てて来た研究会に、有島も参加し、中心的な役割を演じるにいたったことをうかがわせる。有島より一と足早く、一九〇六年（明治三九）には、農学校在学時代からの親友でありともに下級生を導いた森本厚吉

が、大学予科講師として母校に帰り、恵迪寮に「サーター・リザータス」の読書会を始めるなど学生の間に新風を吹きこんでいた。その後をうけて有島は、一九一五年（大正四）農科大学に辞表を出して東京に去るまで、かつて師新渡戸稻造がそうであったように、教室や恵迪寮や自宅で、また遠友夜学校で、思想・文学から美術にいたるまで八面六臂の働きをして、大学の中にリベラル・アーツの復興の気運をもたらした。彼自身は思想的な混迷の中で苦しんでいたにもかかわらず、有島は学生の兄貴分のような態度で彼らと交わり、熱心に導いた。こうした活動の中心にあったのは、彼の日記に「社会主義研究会」、「weekly meeting studying socialism」、「weekly meeting of the study of socialism」、「socialist meeting」（この表現が一番多く）、「socialism meeting」等一連の表現で記される毎週木曜夜の研究会だった。

この研究会は、かなりインフォーマルなもので、メンバーも特定していなかったようだし、会の性格についても、人によって受け取り方はさまざまであった。しかし中心メンバーとして積極的にグループを導いた、有島の日記の中の記述は、研究会の性格についての最も基礎的な史料であり、有島日記をその他のメンバーの回想などによって補って見ると、研究会の輪郭がかなり明らかになって来る。

この日記に記録されている、一九〇八年（明治四一）一月二十三日から同年十月十五日までの研究会で、有島が語った論題は、*Ruskis, Unto this Last*, 'my experience of manual labor when I was in U.S.A.' 'The relation of Christianity and social problem,' Seligman's *Economic Inter Pretation of History*, など。Ely's *Socialism and Social Reform*, *Socialism, Revolution, and Internationalism* も取り上げられたようである。有島の他には、蛎崎知二郎や逢坂信忠、橋礼二（のち橋内と改姓）らの「社会主義と基督教の關係」、『Socialist sentiment in Japan, ...the anticipation on the future of socialism and so forth』など。他のメンバーの回想類によれば、その他、例えば『ハンドブック・オブ・ソーシャリズム』（W. D. P. Bliss, *A Handbook of Socialism*, 1895. である）、『Principle of Socialism, 'Anachism' クロボトキンの『相互扶助論』、『青年に訴ふ』等が取り上げられ、有島がロンドンで訪れた、クロボトキンやフェビアン協会についても語られ、大石泰蔵がアプトン・シンクレアについて論じた。これら社会主義文献の多くは、有島が、アメリカ留学中に入手して持ち帰ったものと伝えられている。

研究会のメンバーないしは、この会に出入りした人々についても、同様の史料によって見当をつけることができる。

有島^{*}のほか、予科ドイツ語講師の吹田順助。当時札幌にいた卒業生で、一八九〇年代後半の農学校社会派の仲間だった蛎崎知二郎と足助素一、有島の友人の鉄道技師^{*}原久米太郎、外科医佐山英男。学生としては、一九〇〇年（明治三三）予科入学で、病気のため卒業が遅れていた逢坂信忠を筆頭に、一九〇四年（明治三七）入学の末光信三、橋礼次、鈴木限三、丹羽七郎。一九〇五年入学の竹田義治、田中清作。一九〇六年入学、大石泰蔵、大内武次、清水清太郎、前田謙吉。一九〇七年入学、原田三夫、松尾修一、中田公直、丹羽八郎（^{*}は札幌独立基督教会々員。『札幌独立基督教会会員籍（名簿）写し』による。）これらの名と、逢坂信忠の卒業を記念して撮った研究会に集った人々の写真（『写真集 北大百年』に所収）にうつっている二四人の顔ぶれとはかなり重なるのではなからうか。

このグループの動きは、全国的な社会主義運動の中心の東京と直接に結びついていた。有島がいわゆる議会政策派の西川光二郎が送った社会主義新聞を講読すべく何種類か読みくらべ（日記、一九〇八年二月二十七日の項）、西川対片山潜という社会主義の指導者の間の分派対立に切実な関心を示し（同前、三月二十九日）、西川の著書『改革者の心情』を読んでその独自の個性を讀め（同前、四月十二日）れば、学生の大石泰蔵は、いわゆる直接行動派の訴えによって社会主義的な青年の心をとら

えていた幸徳秋水が訳して秘密出版された、クロボトキンの『麵麴の略取』を入手し、教師の吹田順助に売り（吹田『旅人の夜の歌』一九五九年、八二ページ）吹田はこれを有島に借す、といった具合であった（柳田泉ほか編『座談会大正文学史』一九六五年、中の吹田の発言、一一〇ページ）。

有島を始め、グループの人々の活動は、農科大学の学生内に次第に拡がっていった。有島が学生と一しょになって『文武会会報』の編集に打ちこみ、毎号のように執筆していたこともあつたのだらう、同誌の誌上には明らかに彼の影響のもとに書かれたとおぼしき論文が登場し、その他同時代批判の文章が数を増す。「大二 蝶人」の「露国に於ける旧式組合『アルテール』」（五六号、一九〇九年三月）、「大二 巢守」の「クロボトキンの相互扶助」（五七号、一九〇九年六月）、アプトン・シクレアとその影響を論じる「予三 たい生（―大石泰蔵か）の「乱調」（同前）、「大三 蝶人」の「クロボトキン主義の経済的前提」、「大二 舍利生」の「露西亞農民の窮状」（六二号、一九一一年）といった論文は、有島に近い学生たちの手になるものと考えられよう。その他、一・二期が農学校の黄金時代だったとして、農科大学の安逸と現状維持を批判する、「大一 北斗生」の「時事我観」、「大二 蝨斯」の「冷視録」（五八号）、「予一 慧羊」の「吹雪集」（五九号、一九一〇年

三月）、「大二 SI生」の「英國に於ける小農増殖制度」、「大一 沈流」の「農民政策」、「社会主義必ず不善」か？と問い「規則の首械から脱したい」と訴える「予一 しづえ」の「伯父へ」なども、いずれも社会批判の立場をはっきり示していた。予科生の一人原田三夫は、有島を中心とするこの研究会に集った「社会主義者」にふれて、「その一人の本科三年の逢坂信忠は過激な急進派で、私が入学したばかりのとき、（恵迪寮の―）食堂で毎月開かれる茶話会で、修養のために教育勸語が一番よいと訓した、^{「マヤ」}温健な学生監の橋本左五郎教授と激論を戦わせた」（原田『思い出の七十年』一九六六年、七〇ページ）と回想しており、逢坂自身は、「その（―文武会の）公開演説会で、ぼくなど（―社会主義を）大びらで発表したよ」（『朝日新聞』北海道版一九七六年四月二十一日）と語っている。

有島を中心とする学生のグループは、すでにふれたように、幾つかの細い系で、全国的な社会主義運動の中心につながっていた。しかし、その反面、農科大学内の彼らの動きは、学外の札幌・北海道の社会主義や社会運動とはほとんど没交渉であり、地域社会の具体的な問題への関心は薄い。そのような彼らが、地域社会の具体的な社会問題にふれるほとんど唯一の通路は、彼らの先輩たちにとってと同じように遠友夜学校であった。有島自身、一九〇九年（明治四二）一月には、同校運営の

実質上の責任者である「代表」となり、学生たちも教師として献身した。その中には、遠友夜学校の生徒に対して、自分の奉じる信念を訴えるものも出て来たようで、有島は、生徒のグループ「リンコン会」での逢坂の演説を聞いた夜、*“There was a fire in Osaka's speech. He will distinguish himself as a good agitator when he enter the career socialist propagandist.”*（一九〇八年九月二日付日記）と記している。逢坂が、東北帝國大学農科大学最初の卒業生として卒業するに際し、卒業論文のテーマとして選んだのは、「札幌ニ於ケル労働問題」。後年、卒業に先立って、英国のユニバーシティ・セツルメントに感銘を受けて、日本のアーノルド・トインビーたらんことを志し、卒業に当たっては、「業を卒ゆるや否や、直ちに日本の社会運動に参加せん事を熱望……、熱求……」（逢坂、前掲、二一〇六ページ）したと告白している。

五

しかし、札幌農学校—農科大学における社会問題・社会主義への関心のこの第二の高まりは、一八九〇年代後半を通じる第一のそれに比して、思想や理論を理解する面ではるかに進んだにもかかわらず、より短命に終わった。有島が情熱を傾けて

社会主義の研究会を始めた一九〇八年（明治四一）の秋には、早くも、次のような憤りのことが書きつづられる。

“After supper a visit to Prof. Takaoka (—高岡熊雄か). I became detested to teach governmental institute. It shuts up some kind of study. It tyrannize the real spirit of investigation. Once Bruno called Oxford “An old window of intellect”; I sincerely wish that Jap. Univ. would not get same type as this from high minded person. (十月七日付日記)

多くの学生の心をとらえていた有島にかわって、「カチカチの国家主義者」溝淵進馬が、予科の倫理講話を担当するにいたったのも、この前後らしく、原田三夫は、溝淵は「札幌農大が自由主義で赤化したものも少なくないといううわさを聞いた文部省が、その風潮を矯正するために、先生を派遣したのである」（原田、前掲、七一ページ）と回想している。このような見方がどこまで正しかったかは一とまずおくとして、少くとも学生たちが有島や溝淵の動きについて、このような見方をしていたということがわかれよう。

一九一〇年（明治四三）に入って、社会主義研究会と併行して行っていたらしい「土曜会」について、有島が「一先散開と申事に相成申候。大石（—泰蔵か）君等より夫々御通知有之候ひ

し筈。結局小生の不肖かくの始末に到らしめしもの汗顔の至に不堪、偏に兄等の許恕を請ふの外無之候」(五月二十四日、前田謙吉あて)という通知をするにいたったのも、事態のこのような推移と関係しているのではなからうか。同僚および学生として、有島と近いところにいた人々はいずれも、いわゆる大逆事件の社会主義弾圧が行われ、北海道ではそれに続く時期に皇太子の行啓があったこの年、北海道庁が、有島を危険人物視し、農科大学当局に注意をして来た旨記しており(吹田、前掲、八一ページ)、学生についても、道内の旅行先まで警官の尾行が行われたことが今日明らかになっている(大石泰蔵の監視を担当して、北見の近藤直作農場に出入していた警官が後年打ちあけたところによる。近藤治義著・刊『近藤直作』一九七二年、五二―五三ページ、ちなみに近藤治義は直作の息、一九二五年(大正一四)、北海道帝国大学農学部卒、本書所収「大正期の北海道帝国大学とキリスト教」でふれられる)。このころの有島の書簡は、農科大学教授間の萎縮した雰囲気と、社会派学生の就職の困難を報じている。「逢坂(―信慈)君……就職の事実^(マコト)に気の毒なれども小生は……可然処は漁り尽し、官部先生高岡先生の如きは御存知通社会主義に恐れを為してとりあはぬ体たらく、大にゆきなやみ居申候」(八月三日付、前田謙吉宛)。「有島は、この三年後にもなお、郷里に帰って農学校長をつと

めている、札幌農学校以来の親友末光績に宛てて、「逢坂信吾君二三年に互りて職を求めつつあり、兄の学校に於ては尚教員を要することなきか、君は社会主義者なれども、立つべき時の来るまでは謹んで其口をつぐむべきことを云へり。……」(一九一三年一月七日、末光績宛)と書き送っている。」

翌一九一一年(明治四四)に入つて、有島たちを取り巻く事情はさらに悪化したらしく、有島とのインタビュに基づいて作られた年譜によれば、この年「危険人物として北海道庁の監視を受けた」(『新潮』一九一八年三月)という。こうして農科大学の制度や学生の態度に対する有島の不満は、次第につつていったようである。これも札幌農学校以来の親友木村徳蔵宛。

結局今の教育界は兄が理想しつゝあるが如き教育家の存在を必要とせざるに似たりと存申候。生の如きも英文学^(マコト)に何等他に誇るべき造詣あるにあらず唯学生相手と相交るを得て何等かの貢献をなし得んことを庶幾しつゝありと雖も、官立教育機関の組織はかかる余裕を教員には与え申さず候。学生も可成正確なる専門知識を要求するの外教師に對して求むる所は落第せざる点数位のものに御座候。生は自ら専門家たり得ざる自個の資質を笑ひつつある次第に御座候。

到底自己理想の教育を為さんと欲せば現代にあつては自ら塾なり学校なりを開くの外なき事と在申候。然らざれば不平滿腔遂にそれを披瀝し尽すの時はなかるべく存申候。若事情の已むを得ざるものあつて現在の教育機関に籍を置かんとならば身の察々を以て汝々の侵す所とならざらん様消極的手段を講ずるの外なき事と存申候（十一月二十九日付）。

ここにうかがわれるのは、念願かなつて帝国大学に昇格した母校に専門化が進み、自己の理想を抱いて学生と親しく交わりつつ彼らを教育しようとする、アマチュアリズムの成り立つ場が次第に喪われてゆく事態であるといえよう。有島の心中には、大学の「汝々」——オプスキュランティズム——への憤りが鬱積していったようである。また、同じ年の『文武会会報』六三号の編集後記は、「僕等は、諸君が思想の自由——学生としての——を有して居らるる事を、知って居ります。あゝ思想の自由。之れは、自己の感想を何等の制肘なしに、公言し得る、最大の特権ではありませんまいか」というやや思いつめたふうのことばで結ばれていた。

そうして一九一三年（大正二）、有島より弟生馬宛。

今の学校の教育なるものは益いやに相成申候。中庸と申し候事を——中庸が極動と云ふ熔炉を通過せずして成就し

得らるゝ容易なるものとも思へるらしく——第一と心懸け兎角天下に事なかれかしと夫れのみを専念致居候有様は寧ろ憐れむべく候。学生全体の謀叛が起らざるが不思議な位のものに候（二月二十五日付）。

有島はこのように、大学の制度の枠内での教育に失望を深めながら、なお、その枠を越えた、学生との自発的な学習の場に期待をかけたらしい。一九一四年（大正三）二月二日付の書簡には、「三十一日の晚いよ／＼読書会を開いた。人数の制限して来会する者九人、議論は可なり出たが要するに幼稚なものだ。然し何等か寄与することが出来ると信じてゐる」（足助素一宛）と告げられている。「いよ／＼」開かれた読書会が、かつてとは異なり、人数を制限するようになっていた所に、有島を取り巻く環境や、有島の考え方の変化を見出すことは出来ないだろうか。「読書会」がどのようなものだったかはわからないが、この新しい企ても実を結ぶにはいたらなかったのではなからうか。この年有島の身辺には確かに多事となり、十一月には札幌を離れねばならなかったのである。

有島は、一九一五年（大正四）、農科大学に辞表を提出したが休職扱いとなり、その後任として翌一九一六年（大正五）には、農学校在学中有島の社会主義研究会に出ていた末光信三が、予科の教師として母校に帰った。農科大学には、有島より

早くから親友森本厚吉があり、末光も有島のように学生を愛し、熱心に導いた（末光信三は、一九二〇年同志社予科教授に転じて、北大を去った）が、有島を中心とする教師・卒業生・学生の集団を中心として形成されたような、同時代の社会や思想への生き生きした関心は、農科大学から姿を消すにいったた。

一八九〇年代中頃、明治二八・九年頃から、消長はあったがとだえることなく続いて来た農学校・農科大学の中の、社会問題・社会主義への関心が、明治末一九一〇年代に入って跡を断つにいたったについては、農学校・農科大学の社会派学生たちが札幌農学校進学を選択した動機、卒業後の針路やその選択の動機や意識、といった社会学的な特性があずかっていたように思われる。こうした学生の数はいくらでも多くはなく、右のような事情を知りうる史料も限られている。しかし今日見ることの出来る史料から、彼らの間に、次のような傾向がかなり共通していることがうかがわれる。

まず、こうした社会派学生の多くは、北海道外の出身者であり、内村鑑三や志賀重昂の著作や、教師・先輩たち——特に札幌農学校出身の——のことは通して、他の世俗化した大学・専門学校とは、なお歴史的背景と性格を異にする札幌農学校に憧がれ、「内地」の都市の「文明」から、北海道の「自然」に

逃れることを願っていた。彼らには、ロマンティックな理想主義が共通していたのである。

ロマンティックな理想主義は、その反面において、観念的であり心情的であった。社会問題に開眼し、社会主義に関心を抱くようになって、北海道や札幌という地域の身近で具体的な問題に眼を向けることは、社会派学生の間に伝統に近くなっていた遠友夜学校での働きを別とすれば、まれであり、農学校・農科大学外の、札幌市民の中の社会問題や社会主義者との交渉は乏しく、当時抬頭しつつあった炭鉱労働者の運動などは、彼らの視野に入らなかったように思われる。

そのような学生たちは、卒業とともに、また中にはそれをまらず中退——転学というコースをとって、札幌を去った。彼らは本州の都市や郷里に職——特に教師・ジャーナリズムなど知的職業——を求め、あるいは、農学校・農科大学よりも将来に広い可能性を約束されるように思われる他の学校に移って、さらに学業を続けた。教師として母校に帰った有島武郎・森本厚吉・末光信三・鈴木限三といった人々はいくらでも、空知農業学校の校長、空知農会の指導者として農業教育と農民の指導に情熱を注ぎ、道庁と争って職を去った蛸崎知二郎のような歩み（農業学校を拠点として——蛸崎知二郎）北海道総務部行政資料課編『開拓の群像』上、一九六九年、二二二—二二八ページ）

ジ。なお、岩見沢農業高等学校五十周年記念事業協賛会年史編纂部会編『開校五十年史』一九五九年、一四九―一五一、二七八―二七九、三一八―三二〇ページ、参照をした人は稀であった。社会派学生が、このような意識をもって、札幌農学校に入ってから、卒業してゆくという事情のもので、彼らのまとまりを維持するに与って力あったのは、何よりもまず、彼らの特徴づける、教師―上級生―下級生を包みこむ濃密な友情と、それに支えられて、卒業後まで続く、年長から年下へのコミュニケーションであった。その時代の精神的雰囲気や全国的な社会運動が外から働きかけていたことも、すでに見たとおりである。

社会問題や社会主義に関心を寄せる学生のグループの、社会的構造がこのようなものだったとすれば、一九一〇年代に入ってから、農科大学内および学外の事情は、彼らにとって極めて不利なものであった。学外での実践に出ようという気分が薄い、教師と学生の間だけの、青年らしい談論風発の交わりも禁止されるような事態のもとでは、制度的に定められた教育の枠をこえる、あるいはそれを批判もするような思想的な関心を、教師から学生へ、上級生から下級生へと伝えてゆくことは、困難であった。「大逆事件」後の全国にわたる社会主義取締りの状況のもとでは、学外からの思想的な刺激によって学内の精神的雰囲気が変わることも期待できないであろう。こうして

札幌農科大学から、社会問題・社会主義への関心は姿を消した。一九二〇年代に入ってから、北海道帝国大学の学生の内に姿を現わし、活発に活動し始めた社会派の新しい世代の人々は、明治の世代とは、人的な系譜では全くつながっていないかったし、彼らから思想や経験の蓄積をうけつぐこともなかったのである。

本稿作成については末光力作（末光信三令息）、堅田精司、佐藤忠雄の諸氏に、史料の提供をいただいたほか種々の御教示をうけた。また新渡戸稲造研究、有島武郎研究を始め、これまでの多くの研究に負う所大きい、引用史料を記したほかは、研究文献を注記することをしなかった。あわせて心から感謝申し上げる。

（北海道大学法学部教授）